

# 象徴と暗号

## 吉原瑩覚

弘法大師空海の真言密教は、六大法身大日如来が自内証を「声字実相」の曼荼羅の世界(法界)として「即身」に開顕する「法身說法」(『弁頭密二教論』)を基本とした曼荼羅の宗教である。曼荼羅(mandala)は本質を具有するもの、輪田具足、全体的統合性であり、如来の究極的境地を開示する「象徴的表現」を意味している。スイスの精神医学者ユングが象徴(Symbol)を Sinnbild [sinn(意味―意識、合理的)+ bild(絵、像―無意識、非合理的)]として分析し、心的事象の固有のエネルギー変換器であるとし、東洋の mandala を「象徴の中の象徴」であると述べていることは、注目に値する。

空海の『即身成仏義』にいわゆる四種曼荼羅(大、三、法、羯)の中の法曼荼羅(言語、音声、文字、名称)および『声字実相義』の四句一頌「五大皆有響、十界具言語、六塵悉文字、法身是実相」(声字即実相)との呼応的関連において構想された『吽字義』においては、「吽」の一字を「賀(詞)・阿・汗・麼」の四字に分析し、その一々に「字相釈」と「字義釈」と

を加え、曼荼羅の世界における吽字等の「密号名字」の真義の究明を通じて、金胎両部理智不二の菩提心の種子である「吽字」の深秘釈によつて、真言密教の三摩地秘観(秘密莊嚴住心の即身的覚証―如実知自心)として開顕され論述されている。「字相釈」は文字の表層的意義を説く浅略の解釈であり、「字義釈」は文字の深層的意義を説明する深秘の解釈である。『吽字義』においては、「字相釈」の段で「賀・阿・汗・麼」の四字に「因業・不生・損減・吾我」という四つの字相を分析的に対応させ、「字義釈」の段では、「別釈」と「合釈」とに分け、有為の諸法の当体がそのまま不生不滅の真如実相であるとし(別釈)、「阿・詞・汗・麼」の四字を「法身・報身・応身・化身」の四身に配当し、「吽」の一字を声聞、縁覚、菩薩の「因・行・果」に約して説き、金胎両部大経にいわゆる「三句の法門(菩提心為因・大悲為根・方便為究竟)」もまた「吽」の一字に還源帰一する理趣が論述されている(合釈)。因業も損減も吾我も阿字本不生(六大法身大日如来、根源

生命)の顕現であり、しかも阿字本不生に還帰する。したがって「阿・訶・汗・麼」の各字義を「因業を損滅して本不生に帰す、本不生は吾我の大我である」と連結して取意することが、卍字の字義釈の基本である。「本不生不可得」は可得の現象世界の根底を貫ぬく永遠不滅の絶対の真理である。不可得なる「本不生」そのものは「如実知自心」の本源であり、「菩提心」の当体である。悉曇「卍字」は菩提心の種字であり、したがってそれは、生のパトス・ロゴスである人我・法我(人法の二我)が本不生の宇宙法界を覚証する「即身」の境位を、麼字の宝珠形で象徴的に表現するのである。

「若し人あつて能くこの卍字等の密号、密義等を知るを、則ち正遍知者と名づく。所謂初発心の時にすなはち正覚を成じ大法輪を転ずる等は、まことにこの究竟の実義を知るに由つてなり。」(「卍字義」)

「若し本不生際を見るものは、是れ実の如く自心を知る。実の如く自心を知るは、即ち是れ一切智智なり。故に毘盧遮那は、唯し此の一字を以つて真言と為したまふ。」(同右書)

「一字、文法界に遍じ、無終無始にして我が心分なり。翳眼の衆生は盲目て見えず、曼儒(文殊)般若は能く紛を解く。」(「般若心経秘鍵」)

「真言は不思議なり、観誦すれば無明を除く、一字に千理を含み、即身に法如を証す。」(同右書)

空海の『卍字義』や『般若心経秘鍵』の中のこれらの諸文には、『即身成仏義』における「重重帝網名即身」の釈にも明らかのように、自己を生かす世界(仏・衆生)とそこで生きる自己とが、因陀羅珠網の譬喩の如く、宇宙の根源的生命のロゴス・パトスの構造の座標原点としての「即(現・法)身」の現実的生において、「心・仏・衆生」三法の平等・無二・一相であるという「六大(体大)・四曼(相大)・三密(用大)」の密号名字(卍字等、如義真実語、真言 || mantra)の曼荼羅(象徴)の世界が如実に開示されている。曼荼羅の実相智は、「我即大日」の表現身として、重重帝網なる「即身」の覚証である。それは、空海の独創的言語哲学である『声字実相義』の四句一頌「五大にみな響きあり、十界に言語を具す、六塵(色・声・香・味・触・法)悉く文字なり、法身は是れ実相なり。」における「法身仏平等の三密、衆生本有の曼荼羅(秘密莊嚴住心)」を成立せしめるところの、根源的生の絶対界と現象的生の相對界とを、絶対否定的に轉換媒介するところの、生の相補性と創造性の宗教的主体(representative person)である「即身」における「如実知自心」の覚証としての実相智の活動そのものである。

ヤスパースの包括者論(Perichonologie)としての形而上学においては、存在(Sein)について哲学することは、新しい暗号文字(Chiffreschrift)を書くことによつて、根源的な暗号

文字を読むことである。それが、存在と思惟との直接的同一性を前提とした直接的方法に対する間接的方法としての、彼のいわゆる暗号解読 (Chiffrelesen) である。ヤスパースは「存在」の理解において、存在と思惟との媒体 (Medium) として、暗号 (Chiffre) や象徴 (Symbol) または言語 (Sprache) を定立するが、こうした暗号や象徴や言語は、実存 (Existenz) によつてのみ超越者 (Transzendenz) のそれとして聴きとられるとるのである。すなわち、超越者への探究は超越者に対する実存的関係のうちにあり、しかも超越者は暗号文字のうちに現在する。暗号文字によつて世界内の現存在は超越者と関係づけられ、本来は絶対的現実性であるべき超越者が可能性として自己を顕わにするゆえに、世界という媒体において超越者は実存と出合うのである。こうした媒体は超越者の言語であり、暗号であり、象徴であるから、超越的通心である実存的通心 (existentielle Kommunikation) の深さは、象徴の世界において表現されるのである。本来的な通心は暗号を場所として行われる。「神は隠れて存在する」のであり、しかも「神は直接には語らない」のであるから、実存的通心は超越者の「暗号解読」において、その深さに到達するのである。世界内のあらゆる現存在は、超越者と交叉することによつて、超越者の暗号文字として、実存によつて解読される内在的超越者 (immanente Transzendenz) として、生ける現実性を獲得す

る。すなわち、ひとたび否定された世界の現存在が、実存としての人間的生において、暗号文字として再び生かされるのである。包括者 (das Umgriffende) としての存在それ自体と、存在に関する知としての存在論とが、実存的な超越する働きにおいて再結され、「存在の暗号」として理解される。このように暗号文字においては、存在の Das とともに存在の Was もまた語られるのである。あらゆる世界内の現存在は、実存にとつて超越者に関わる形而上学的対象性として、暗号となる。それは対象的であるかぎり意識一般に対する存在であるが、しかしそれのもつ象徴的機能によつて超越の存在が意味せられている。したがつてそれを了解しうるものは、単なる意識一般ではなく、実存における充実した絶対意識 (absolutes Bewusstsein) である。なぜならば、超越者は実存の絶対意識においてのみ、われわれに語りかけるからである。あらゆる現象が暗号として現われるということは、暗号が言語としての性格をもつことを意味する。現存在は超越者との関係においてのみ、超越者の暗号として存在への通路となる。暗号文字は形而上学的対象性であつて、世界内在の対象性とは区別されねばならない。ヤスパースにおいては、暗号文字は「第一言語」、「第二言語」および「第三言語」と呼ばれるものであり、実存の絶対意識の対象性である。超越者の直接的言語である第一言語は、実存の絶対意識にのみ現在し、個々人の

歴史の一回性の瞬間において聴取される。第二言語は非通心の第一言語を、実存相互間の伝達可能な翻訳的内容としての物語や形象や人物や所作を指示する。第三言語は第二言語の具象的形態に対して、抽象的形而上学的思惟であり、新しく書かれた哲学的言語であり、しかもそれは、第二言語を通じて可能的第一言語を包括的に代表し、現実的な超越経験を指示するのである。要するに、ヤスパースの包括者論としての形而上学においては、超越者は「包括者の包括者」として、超越の主体である「実存」に対してのみ、世界内の現存在を存在と思惟との媒体として定立された「暗号文字」において、みずからを象徴的に開示する。超越者は、世界内の現存在・意識一般・精神に対しては、直接的には何も語らない。世界内在のあらゆる現存在は、超越者と交叉することによつて、超越者の暗号文字として、超越の主体である実存によつて解読される「内在的超越者」として生きた現実となる。こうした世界内在の現存在はすべて、超越者との関係においてのみ、超越者の暗号として存在への通路となる。暗号文字は、第一言語（超越者の直接的言語）、間接的な人間の言語である第二言語（物語、形象、人物、所作など可視的言語）および第三言語（形而上学的思弁形式、思惟的象徴）、以上三つの言語の性格をもつものであり、しかもそれは実存の絶対意識の対象性なのである。

以上の考察から、空海の『卍字義』における「大覚、正遍智者、六大法身」としての「大日如来（毘盧遮那）」および「世界 (Tokai)」としての「三種世間」を「如義真実語、真言」としての「密号名字」たらしめるところの、「無我の大我、我即大日」の当体としての「即身」と、ヤスパースの包括者論における「包括者の包括者」としての「超越者」、および「世界 (Welt)」内存在としての「現存在」を「形而上学的対象性(実存の絶対意識の対象性)」としての「暗号文字」たらしめるところの、超越者に直面する「超越的自己」としての「実存」とを、両者の比較思想的方法的視座として、空海の真言密教における如義真実語(真言)そのものとしての「密号名字(卍字等)」を、ヤスパースの包括者論の暗号文字の形而上学における「第一言語」に、空海の『卍字義』における「密号名字」の「字相」および「字義」を、ヤスパースの暗号論における哲学の対象および哲学の思惟そのものとなる「第二言語」および「第三言語」に、それぞれ対照して比較哲学的に考究すれば、空海の根本思想である六大縁起論の曼荼羅の「象徴的表現」とヤスパースの実存理性(理性的実存)の包括者論の中核的機能である「暗号解説」の真義の理解がより深化され、さらに東西思想交流の通路の開拓に役立ちうるといえるであろう。

(神戸女子薬科大学教授・文博)